

四月の統一地方選から約三カ月。各自治体の議会では、議長、副議長が決まり、定例会が開かれるなど、新たな顔ぶれによる運営が始まった。ここ数年、議員のなり手不足、質の低下など、議員をめぐって各地の議会の問題となっているが、選挙を経て、その傾向は変わるのだろうか。だが、北海道を代表する道議会と札幌市議会での議論をみてみると、少々絶望的な気分にも陥ってしまう。

◇ ◇

札幌市議会で五月以降、最も注目されたのは松浦忠氏をめぐる騒動だ。松浦氏は当選九回目の最長老。議長を決める本議会で慣例に従い臨時議長に就任したが、突如、立候補制による議長選任を提案。開会前に立候補したのは「自分だけ」として議長に就任することを宣言した。他議員の強い反発を受けながら、九時間以上も議長席に居座り、議会を空転させた。松浦氏は同日解任されたが、それまでの議員の時間外手当約一七〇万円の新たな支出を余儀なくされた。ことはここで収まらない。松浦氏は以前、暴力行為やセクハラの問題などを起こしており、今回の議長席占拠で、地方自治法に基づき、議員資格をはく奪する「除名」の動きが加速した。松浦氏は非を認め、議場で土下座。一部会派からは除名に異論があったが、自民党、民主市民連合の二大会派などの賛成多数で除名が決まった。

除名と喫煙から見える議会の質

松浦氏は確かに独自の行動が多い議員ではあった。だが、その地域活動には熱心で、四月の市議選でも白石区で一万票以上を獲得し、定数七人中、四位で当選。本人の反省の度合いは別にして、表面上は一連の行動を謝罪しており、除名まで必要だったのだろうか。「不寛容な時代」と言われているが、道都の市議会までが、その象徴のようだ。

松浦騒動で揺れていた時期は、中央区の女兒衰弱死と重なる。児童相談所の対応をめぐってはいくつもの問題点が指摘されていた。なぜ女兒の命を救うことができなかったのか。市議会として最も力を入れるべきは、この問題ではなかったのだろうか。

松浦氏側は除名の撤回を求め、提訴した。松浦氏自身の議員としての質が問われるだろうが、それ以上に、除名に突き進んだ自民、民主の二大会派の質も問われよう。

◇ ◇

一方、道議会で今、焦点となっているのが、新議会議事堂で喫煙を認めるか、否かだ。喫煙室を求める最大会派の自民党・道民会議と、対応が揺れた第二会派の民主・道民連合、全面禁煙を求める他会派で意見が分かれてまともならず、時間を費やしている。札幌市議会と同様に、二大会派が議会運営の足を引っ張る構図だ。

改正健康増進法が施行され、受動喫煙対策が強化された。七月からは道庁などの行政機関は屋内が全面禁煙となった。ただし、

議会はその対象外で、全面禁煙とするかは議会の判断に委ねられている。

現在の道議会議事堂には、自民と民主の会派控え室内と傍聴者用の喫煙所が計三カ所ある。自民党は喫煙所の設置を求めることを会派として決定。民主も同様の方向だったが、全面禁煙を求める声もあり、禁煙に方針転換した。

受動喫煙対策は時代の流れであり、要請でもある。行政機関を規制しながら、行政機関をチェックすべき議会がその規制外で、喫煙所を設置しては、受動喫煙の被害を受ける子供たちにどう説明するのだろうか。「皆さんへの受動喫煙対策より、喫煙する議員の意見を優先させました」と答えるのだろうか。

禁煙に消極的なのは道議会だけではない。他の県議会でも少なくない。議会が改正健康増進法の規制外になったのも、喫煙派議員への付度とも受け取れる。だが、来年に五輪を控える東京都議会は二〇一八年から全面禁煙したように、自らを律する議会もある。

◇ ◇

市議除名と禁煙問題で見えてくるのは、議会の劣化だ。道議、札幌市議とも任期はあと三年半以上ある。誰のための議論なのか、首をかしげたくするような議論ではなく、北海道と札幌市の将来、道民と市民の生活のために、真つ当な議論をしてほしい。

ハ洋V